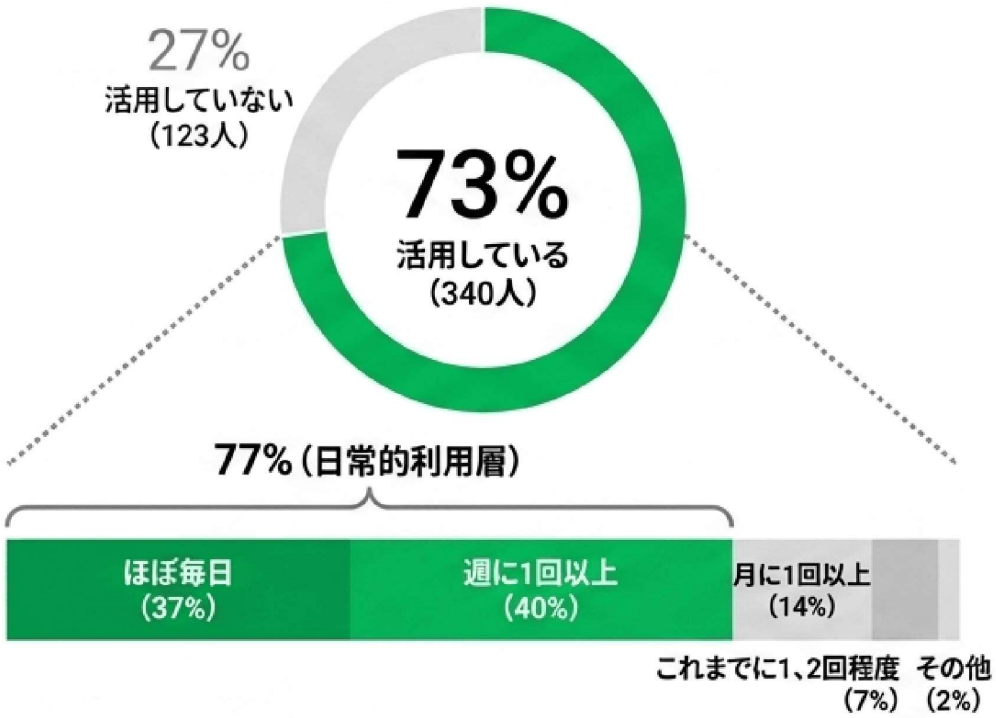
資料1

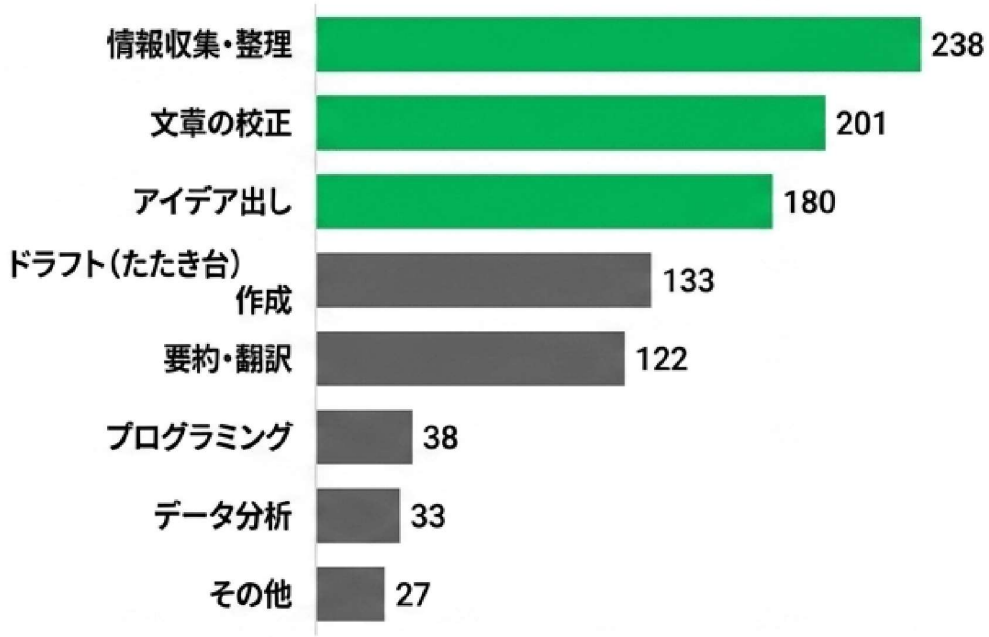
生成AI：県職員の7割超が活用 3割弱が未活用

組織への浸透度と日常化



利用者の約8割が、もはや『週1回以上』の日常的ツールとして使いこなしている。日々のよくある業務から、確実なAI化が進行中。

主要な活用領域と具体的な変化



単なるリサーチや校正ツールにとどまらず、『アイデア出し』や『ドラフト作成』に積極的に活用されている。AIをブレストや壁打ちの相手とすることで、新たな価値とアイデアを創出する強力なエンジンとして機能している。

データ：令和8年2月・福井県庁職員の生成AI利用アンケート結果
図解　：データを基にNotebookLMで図を生成

2040年 職種別就業構造推計：首都圏と福井県のミスマッチ比較分析

資料2

首都圏（1都3県）で発生する雇用余剰に対し、福井県が特に「専門職」の受け皿として機能する客観的構造

	首都圏（1都3県）		福井県
2040年合計ミスマッチ数	+193.3（大幅な余剰）	広域移動のポテンシャル →	-1.3（不足）
専門職ミスマッチ数	+8.4（余剰）	需給の完全な一致 → 首都圏の専門職余剰が、福井県の専門職不足を直接的に補完する構造。	-1.3（不足）
事務職ミスマッチ数	+182.6（大幅な余剰）	← 双方で余剰傾向 →	+2.3（余剰）
現場人材ミスマッチ数	-1.6（不足）	← 双方で不足傾向 →	-1.9（不足）

参照：2040年の就業構造推計（改訂版・経済産業省・26年3月）を基に山岸が分析・整理

【データ分析サマリー】

推計データによれば、2040年に首都圏全体で生じる約193のミスマッチ（余剰）に対し、福井県は全体として労働力不足（-1.3）の状況にある。職種別に見ると、首都圏で顕著な余剰となる「専門職（+8.4）」は、福井県が抱える「専門職不足（-1.3）」と需給の方向性が完全に一致しており、福井県が首都圏の専門職人材の受け皿となる客観的・構造的なチャンスが高いことが示されている。

○生成AIを活用した授業研究会（R8.1.27実施）

令和8年2月8日（日）福井新聞　9面

26年6月 一般質問
山岸みつる（ふくいの党）補助資料

羽水高、生成ＡＩ授業公開

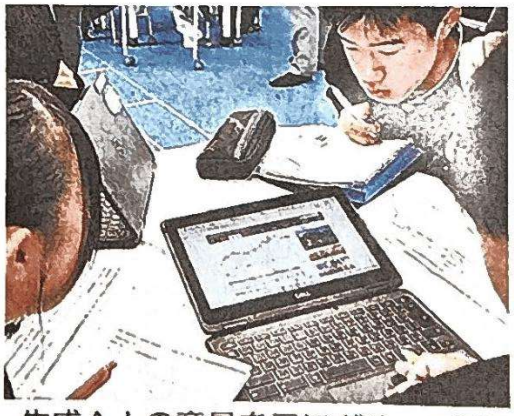
公民など３教科　思考や視野広げる活用

「次世代の授業に向けた先進的な学び」モデル校の羽水高で、生成ＡＩを活用した数学、公民、国語の公開授業が行われた。選挙の当確判定、株価予測などを題材に、生徒各自が生成ＡＩを活用し、思考のキャッチボールや考えを深める材料に使った授業例を紹介した。

普通科2年の数学は、「開票率０％の段階で報道機関が当確を出すには、どれくらいの出口調査数が必要か」を題材にした確率の授業で、生徒がいったんまとめた考察を生成ＡＩに投げかける手順をとった。竜田和樹教諭は「数学は解法を学び、答えがあっているか、という学習になりがちだが、統計用語の意味や役割、数値の変化が示す意味など、統計の概念も含めて深く理解してもらいたいと授業をデザインした」と話した。

生成ＡＩ活用を実践紹介した教員対象の公開授業＝１月27日、羽水高

生徒が活用した教育用ＡＩは、質問に答は示さず、思考を深める質問を返すように竜田教諭が事前設定。「生徒の質問のレベルや内容に応じて生成ＡＩの返答が変わるようにした。従来の授業の良さを残しながら個別最適な学習を実現する活用を目指した」と話した。生徒が記入した質問などはリアルタイムで竜田教諭も把握。授業の進行に役立てるほか「振り返りは取りまとめ、次の授業の参考にする。それは教員の役割」とした。



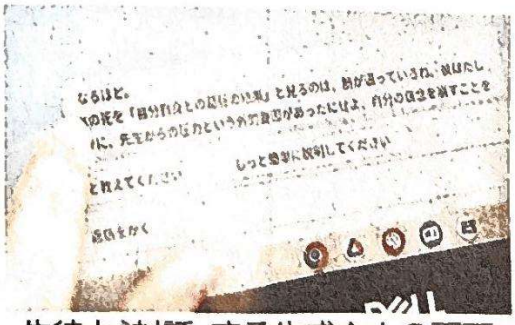
生成ＡＩの意見を元にグループで話し合う生徒

株価変動予測の公民の授業では社会情勢や企業名など、生徒の知識が不足する部分はＡＩが知らせる設定に。国語教科では夏目漱石の「こころ」を読んで生徒が作成したリポートに、抜け落ちている視点がないかを生徒自身が生成ＡＩに投げかけた。生成ＡＩが示した観点はうのみにせず、改めて作品を読み直して自分でも腹に落とす手順を踏むなど、「原本に立ち戻る基本」は重視した展開とした。

県教委によると、生成ＡＩは生徒の実生活に浸透してきており、「生徒それぞれの考え方や理解度に合わせて考えを示してくれるなど個別最適な学習に向くメリットがある。教員の個別指導の補助にもなり、効果的な活用法を探っていきたい」としている。

公開授業を含む報告会には高校教員や県教委職員など約40人が出席した。青山学院講師の安藤昇さんが最新のＡＩと使い方を紹介。「最新のＡＩはＡＩ自身が考えてくれるため、命令ではなく相談形式がいい」とアドバイスし、この日の授業を最新ＡＩで実践した例を紹介した。

（菊野昭彦）



生徒と〝対話〟する生成ＡＩの画面